

花びらの詩：吉野の桜に霊的なルーツがある理由

毎年吉野の春には、何千もの桜の木が咲き乱れる中、丘の中腹はピンクと白の壮大な色合いを帯びています。私は長い間このことを古典的な日本の詩で読んでいましたが、吉野を訪れて初めて、その素晴らしさを自分の目で見ました。桜の木は何世紀にもわたってこの地に天皇、貴族、武士、詩人を普通の人々とともに描いてきた、魔法のような異世界の風景を作り出します。これは、お餅と餅粉で作っただんごをたっぷり使って行うのが最適です。

しかし、桜の木には、きれいな飾りよりもはるかに多くのものがあります。一つは、花のはかない性質は1週間ほどしか続きませんが、しばしば美と人生そのものの美しさの象徴として日本の芸術や文学に描かれています。古今若歌詩集の編集者の一人である紀友則（c.850-c.904）は、この詩を残しました。

み吉野の
山辺にさける
桜花
雪かとのみぞ
あやまたれける

別の編者、紀貫之（872-945）は、使い古された素晴らしい手法ではなく新しい詩を読みました。

越えぬ間は
吉野の山の
桜花
人づてにのみ
聞きわたるかな

芸術的なインスピレーションの源であることに加えて、桜は精神的な植物です。お花見の芸術を楽しむ多くの人々は、桜が吉野自身の起源と密接に関連している深い宗教的次元を持っていることに気付かないかもしれません。それは1300年前に住んでいた隠者と関係があります。

役行者または役小角（634-c.700）は、山岳信仰と民間信仰を、神道、仏教、そして密教と繋げることで高度に融合した宗教である修験道の創始者として知られる半伝説的な神秘家および術師です。伝承によると、役行者は大峰山で1000日間祈り、仏と弥勒菩薩と観音が訪れました。彼は、人々を正義の道へと導くために、その形を恐ろしい神の形に変えるよう懇願しました。かれらは天に昇り、雷と火が噴火しました。その代わりに、新たに創造された神、蔵王権現、神道の神の形での仏の顕現が降りました。その顔は激しい表情をしていましたが、その体は思いやりを表す青色でした。この光景に感動して、役行者は桜の木から蔵王権現の肖像を彫り、神を修験道の主神にしました。

吉野では、役行者が修験道の総本山である金峯山寺を設立しました。役行者の信奉者は、修験道の基本的な役割のために桜の木を崇拝したため、吉野全体に植えました。後の世代の信者は、桜の木を御神木して寄付するというこの伝統を続け、吉野を日本で最大の桜の農園にしました。桜はその美しさで高く評価されているため、日本全国に植えられ、19世紀に東京で開発されたソメイヨシノなどの有名な交配種が含まれています。

吉野の桜の中心部は約 60 ヘクタールに広がり、大勢の巡礼者やお花見パーティーを楽しむ人々による病気、腐敗、被害から保護する組織、吉野山保勝会によって管理されています。また、桜の農園全体を積極的に管理しており、最近、奥千本エリアで 10 ヘクタールの桜の植え込みを完了しました。吉野の約 30,000 本の桜は、霞桜を含む約 200 種類の桜の木です。主な種類は白山桜です。夜には照明がつき、これらは吉野の下千本、中千本、上千本、奥千本地域で見ることができます。人々は長い間、この驚くべき花びらの万華鏡を「一目千本」として説明してきました。日本への旅行者にとって、桜の季節に吉野を訪れることは忘れられない経験になるはずです。